

〔研究発表Ⅲ〕

長崎に根づく中国文化

王 維

〔Presentation III〕

Chinese culture rooting in Nagasaki

WANG wei

《略歴》

王 維：長崎大学教授。専門は文化人類学、民族音楽学。名古屋大学大学院博士後期課程修了。博士（学術）。海外中国系移民社会および中国文化、日中民族音楽の研究。著書に『日本社会における伝統の再編とエスニシティ』、『素顔の中華街』、『華僑の社会空間と文化符号』など。

キーワード：華僑社会、伝統文化、受容・変容・創造、地域社会

1. はじめに

皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました、長崎大学、王維です。よろしく申し上げます。

本日、主に、長崎における中国文化の受容についてお話をさせていただきたいと思えます。長崎は観光都市としてよく知られています。その観光資源の多くは異文化性を有し、とくに中国に関わるものが多いです。建築には、興福寺、崇福寺、聖福寺などの中国寺、孔子廟、眼鏡橋、中華街、唐人屋敷跡などがあり、料理には卓袱料理、普茶料理、長崎ちゃんぽんなど、中国文化の名残を多くとどめています。祭りでは長崎くんち、精霊流し、ペーロン、中国盆会、ランタンフェスティバルなどの四季を飾るイベントが、中国をはじめとする海外との交流の歴史を物語っています。こういった中国文化が、どのように長崎で受容・変容のプロセスを経て根づいているのか、について少しお話します。

2. 文化受容・変容の空間

長崎は歴史上、東アジアの貿易中継地としての役割を果たしてきました。400年余り前からはポルトガル、オランダなど西洋と中国の商人（華商）たちが長崎に来航し、長崎だけでなく九州各地に居留拠点を構えていました。明清時代の華僑の経済、文化活動は当時、日本の社会、経済および文化領域にも大きな影響を与えています。貿易と共に、モノや文化を運ぶ重要な役割を果たしたのは華僑華人です。

2-1. 唐寺

当時は唐人と呼ばれた彼らの長崎の居住、地域社会との交流によって、さまざまな中国の習慣や文化が長崎の地域社会に受容されました。まず唐寺です。出身地が異なる唐人たちが造ったお寺です。現在、長崎の文化財的な資源となっています。唐寺は四つ、すなわち興福寺、福濟寺、崇福寺と聖福寺があります。興福寺は江南地域、すなわち中国の浙江省、安徽省、江西省出身者によって造られました。福濟寺は泉州、漳州の出身者によって造られました。しかし残念なことに原爆で破壊されました。崇福寺は、今でも華僑の祭祀（祭り）の重要な空間ですが、福建省福州、福清地域の出身者によって造られたものです。聖福寺は華僑に関連する方、つまり日本に帰化した、漳州の出身者によって建てられました。この寺はのちに広東出身者の菩提寺にもなっていました。唐寺は日本華僑の地縁組織の原型とも指摘されています。唐寺が成立した背景と役割を簡単とまとめますと、①仏教徒であることの表明とキリスタン弾圧の回避、②航海の安全を祈願する船神「媽祖」の祭祀、③同郷の結束の強化、の3点があげられます。唐寺は祭祀、文化、親睦などの役割を果たしながら、とくに長崎地域社会ないし江戸時代の日本社会に対する文化伝播と交流の窓口であり、文化伝播の空間でありました。たとえば黄檗文化はこれらの唐寺を通して日本に広まったことがよく知られています。

2-2. 唐人屋敷

唐人屋敷は鎖国時代で造られました。その背景と役割を簡単にまとめてみますと、①貿易と人的管理、②来日した唐人を一カ所に集めて管理する必要性の2点に集約できます。ここで強調したいのは、唐人屋敷は唐人の居住空間、貿易の拠点、祭祀の「場」としての内的役割を果たしました。当時唐人屋敷の出入りは役人と芸者のみに限られていますが、唐人祭りの際に限り長崎一般市民に公開しましたので、祭りや風習などが地域社会に伝播する文化伝播ルートとしての役割も果たしていました。典型的な例として、龍踊や精霊流しが挙げられます。

3. 受容された芸能・祭祀

3-1. 明清楽

中国では音楽を宮廷音楽、文人音楽、宗教音楽、民間音楽というように分類されています。「明清楽」とは江戸時代に長崎を通じて日本に伝わった近世中国音楽の名称であり、その中には日本語や長崎弁で歌われた歌謡も含まれています。「明清楽」は長崎では「唐楽」とも呼ばれています。

明清楽の中でも、明楽と清楽、二つがあります。「明楽」は、「雅楽」宮廷音楽や文人音楽の特徴をもっていますし、明楽の曲調や内容は中国の詩、詞と関係しているからです。明楽は大別して二つに分けることができます。ひとつは、明朝末期に長崎に渡来し帰化した魏之琰氏の系統のもの。もうひとつは、これと多少共通するものの、魏氏以外によって伝えられたものがあります。どちらも明朝末中国南方（福建省を中心とした地方）の音楽で、主に唐宋の名詩詞を歌詞とした当時の教養人の嗜好にあった音楽でありました。日本に伝わってきた後、能楽以外の好みがあまりなかった武士も、これを学んで恥じることがなかったようであります。魏之琰の3代目の子孫魏皓はのちに魏氏楽譜を作りました。魏皓は上京の際には、貴族・公家や諸侯の前で明楽を演奏して、明楽の流行を促したという話が記載されています。彼は生前100以上のお弟子を抱えていたと言われています。彼の死後、明楽は次第に衰退していきませんが、その一部分は後に伝来してきた清楽に吸収されました。その弟子によって、今度は、魏氏楽譜図を出版しました。この二つの資料はどんな意義があるのか。実は中国では明代に関する音楽資料が中国に残されていませんので、明代の音楽を研究するために、大変貴重な資料となっています。

明楽の演奏は長崎ではもう見られませんが、数年前、東京の坂田音楽研究所に、明清音楽研究派によって、明楽の復興演奏がありました。映像にある音楽は、詩を歌っています。そういう意味では、文人音楽や宗教音楽に関連しているかもしれません。しかし、これは本当かどうか、当時の録音がありませんので、よくわからないかもしれませんが、一応、楽譜から復元しようと考えられているのでしょうね。

「清楽」は、とくに民間音楽の特徴を持っています。その伝承系統から見ますと、江戸時代後期の文政年間（1818-30）に来航した金琴江と、もう一つは、天保年間（1830-44）に入ってきた林徳健との二つ系統があります。現在の長崎明清楽保存会の系統は後者の系統です。清楽の楽譜もいろいろ保存されていますが、楽器の中で最も重要なのは楽器としては月琴があります。清楽の伝来時には既に長崎唐人屋敷ができ、唐人と日本人との交流は唐通事と遊女たちだけに限られていましたので、彼らはこの時期の音楽の仲介者として、長崎の普通の家庭にまで「明清楽」を広げました。

清楽は19世紀の後半になって九連環などの歌が広く愛唱され、中流以上の家庭の

子女の稽古ごとになり、長崎の商家では男女ともに月琴を奏でるものが多かったようです。長崎諏訪神社祭には清楽をともなう奉納踊が演じられました。1876年、1878年頃には丸山の花町を中心に清楽合奏が盛んとなっていましたが、日清戦争後から衰退し始め、1930年代に入って廃絶寸前まできました。戦後復活し、やがて「明清楽保存会」ができて、地味ながらも継承が図られました。今、保存されている曲の多くは清楽の曲です。

清楽の中には九連還という歌がありました。九連還という歌は、後に看々踊りという形になって、日本全国に広まっていきました。歌や踊りは地域それぞれで異なります。実はYouTubeでは地域の民俗芸能としての看々踊りをご覧になれます。歌詞や名前とも漢字ではなく片仮名で書かれていますが、発音がとても中国語的なものになっているように聴こえます。写真は清楽の有名な合奏図です。唐人屋敷はやはり重要な伝播の空間であり、そこでは清の時代の音楽を演奏しているということがわかります。これは、1880年代のハガキです。面白いことに、子どもたちは着物を着ながら月琴を持っています。明清楽の中でも色々な楽器がありますが、なぜか明清楽＝月琴、というイメージが強いです。このハガキから当時は明清楽がとても盛んであったことが、よく伺えると思います。

これは大正末、長崎の料理店「迎陽亭」で行なわれていた明清楽の写真です。大正末までは長崎でもこういう形で演奏することが可能でした。しかも、中国人ではなく日本人によって演奏されています。

明清楽は現在くんちにも登場しています。これからお見せするのは2015年のくんちに登場した明清楽の映像です。看々踊り音楽の伴奏のもとでの中国服を着ている子どもたちの踊りです。中国風のイメージです。踊りの後ろで弾いているのが、明清楽保存会ではなくて、くんちの踊り町の依頼に受託されている三味線の会「長崎検番」の人たちです。

(明清楽の映像)

3-2. 龍踊り

長崎の龍踊りの原型は、江戸時代に中国から伝わった「龍灯」です。当時長崎の唐寺である興福寺、崇福寺、福濟寺は大変な賑わいを見せ、「龍灯」も演じられました。とくに元宵節の「龍灯」が盛大でした。龍の胴体の中にろうそくをともして、それを持って踊ります。かつてかなり盛大に行われていたことが、長崎名勝図絵にも記載されています。後に「龍灯」は唐人屋敷の衰退によって途絶えましたが、龍踊りを長崎の人々は「蛇踊り（ジャオドリ）」として継承してきました。龍踊りを受容し、今日まで継承できたのは、やはり長崎のくんちという祭事の存在が大きいです。くんちのそのものは中国の旧暦、9月9日の重陽節の風習と関わりがあります。龍踊りは、長崎くん

ちの折に当番の「踊町」（くんちで踊りを奉納する町のこと）によって諏訪神社に奉納されるようになった。享保年間（1716－1730）に始まるとされています。本籠町（現在の籠町）は龍踊りで奉納する踊町の元祖とされます。本籠町は唐人屋敷に隣接し、唐人の出入り口でもあって、遊女達の仲宿もありました。この町は当時来船した唐船の修理などの仕事に携わっていたため、唐人屋敷と密接な関係をもっていました。唐人の龍踊りを見て、これに習い諏訪神社の奉納踊りにしました。龍踊りの技だけではなく、踊りに用いる衣服、楽器、道具の一切を唐人から寄与されたようです。籠町の後1944年に始まったのが、諏訪町の龍踊りです。これは諏訪神社にある蛇に関する信仰に由来するといわれています。現在、龍踊りを奉納踊りとする踊町は、籠町と諏訪町以外、筑後町と五島町があります。筑後町は、1973年から奉納しています。以前、町内に唐寺である福濟寺があったことで、龍踊りも唐人によって伝えられたものだと言いつたされています。龍踊りの人気とともに、「本踊り」（日本舞踊のような形式のもの）を奉納踊りとしてきた五島町も新たに龍踊りを習い、2000年のくんちから奉納しています。五島町が龍踊りを奉納し始めたのは、長崎港開港当初、五島町の船着き場に唐人船が停泊した故事に由来するといわれています。くんちは龍踊りの伝承に対して重要な空間であることがよく分かります。

龍踊りは異国情緒あふれるアトラクションとなっています。くんちの踊町以外、長崎観光龍踊会、十善寺龍踊保存会、および鶴鳴学園長崎女子高等学校の龍踊部のようなグループがあります。これらのグループは地域の文化資源として龍踊りを持って、学校教育や文化伝承、観光振興と地域活性化に寄与しています。

3-3. 長崎地域に共存する二つの盆行事

長崎は二つの盆行事すなわち精霊流しと中国盆がある。精霊流しは、もともと唐人屋敷にあった彩舟流しが起源とされますが、長崎ではお盆の習慣として受容されました。現在、長崎の年間行事の一つとして定着しています。コロナ感染拡大の状況の中でも、長崎ではほぼすべての行事が中止されましたが精霊流しだけ中止せず2020年も2021年も行われました。これは、死者の霊を弔う中止できない長崎の風習になっているからです。この絵は当時の彩舟流しです。この写真は長崎崇福寺で行われている中国盆です。福建出身の華僑を中心に行われる行事ですが、華僑にとって年間最大の行事のみならず、長崎の夏を飾る一つの風物詩ともなっています。

これからいくつかの中国盆の写真を紹介します。これはお盆のとき崇福寺の山門です。この山門は地域の史跡であり国宝になっています。これは門に貼っている盆の開催の知らせです。こちらは多くの観光客がにぎわう境内の様子であり、ながさき旅ネットにも掲載されています。中国盆は長崎の夏を飾る観光行事の一つにもなっていることがわかります。これは御法堂の前の祭壇に据えられた「五亭」つまり、男室、女

室、浴室、京劇台、倶楽部と呼ばれるあの世のための五つの宮殿模型です。この写真は本堂左側の中庭にある「三十六軒堂」です。天界の三十六天を意味します。実際には三十六軒の模擬商店を表しており、仮想冥界の商店街とも言われています。これらの写真は境内を巡回しながら読経している僧侶たちと礼拝する華僑たちです。中国盆は3日間で行われていますが、3日目の夕方は精進明けとされ、鶏や魚、豚供物として生臭料理が用意され、鶏を使った太公望姿の人形などが作られていました。これはその供物の写真です。しかし、この人形が作られる方が亡くられ、後継者がいないため、このような風景が見られなくなっています。現在はショーとしては獅子舞が行われています。最後にあの世に使われるお金として、金貨銀貨を意味するこのような金山銀山を燃やします。

3-4. 長崎ランタンフェスティバル

長崎ランタンフェスティバルは、新地中華街が発祥の祭りです。新地は、1868年以降、華人商人たちの進出によって、唐人屋敷時代後の経済拠点となっていました。しかし、1947年に新地で大火が発生した後に、中国的な建物はほとんど破壊されました。1984年に新地で商売する華僑と日本人によって、新地中華街商店街振興組合が結成されました。重要な活動として、新地中華街のシンボル中華門の建設でした。1986年に中華街の建設が完成し、現在の新地中華街の景観が姿を現したのです。1987年に、中国の春節と元宵節という伝統にちなんだ春節祭、すなわち、赤い灯籠によって中華街全体を美しく飾る灯籠祭でした。

灯籠祭は1994年から、長崎全体の祭り、ランタンフェスティバルとして拡大しました。現在、横浜中華街や神戸南京町においても春節祭が盛大に行われています。長崎のように市全体の祭りに拡大した例は、世界でも長崎しかありません。長崎で生まれた中華街や春節祭文化は、中国的情緒が濃厚に漂っているにもかかわらず、中国文化そのものではない中国風文化としての位置づけが維持されています。このことは、長崎の地域観光を振興し、より多くの観光客を呼び寄せるために、日本人と一緒に新しい地域の伝統が創り出されたということにほかなりません。日本は20数年前に立川中華街や千里中央中華街、名古屋の大須中華街など各地に中華街がつけられましたが、しかし、歴史の土壌がないため、現在いずれもなくなっています。しかし、長崎の中華街や灯籠祭など新しい伝統は、400年の歴史のなかで築き上げられてきた長崎華僑社会と地域社会そのものであり、長崎とアジア諸地域の歴史的に蓄積してきた交流関係の土壌から生まれたものであると考えられます。

4. おわりに

今日は詳しく紹介しませんでした。長崎に受容された中国文化に長崎ちゃんぽん

などもあります。これまで取り上げたいくつかの事例からも明らかなように、地域に受容され、地域と中国文化の交響する社会は世界にも例を見ない長崎の固有の特徴です。このような特徴は、ほかでもなく海外（アジア、主に中国）との交流の歴史が積み重なり、とくに人の交流によって、文化同士が触変する過程を経て築かれました。長崎という場所には、中国から伝わってきた文化が受容・変容のプロセスを経て、大衆化し再構築されるだけの歴史的土壌があり、それは長崎地域に独自のハイブリッド（混交）文化を創造し現代に継承しています。

このように長崎は歴史的にも文化的にも中国を含むアジアとの交流史がもっとも長いという特徴があります。長崎の地域社会が今後一層、国際的な関係性を強化しようとするなら、歴史や文化史を見据え、とくに中国とアジアとの関係構築の側面から、グローバルヒストリーの構築がこれからの重要な課題となるのではないかと思います。

ご清聴ありがとうございました。